

婚約者は聖女を愛している。

……と、思っていたが何か違うようです。

セラティナープラティーン

芯が強く、一度決めたことに対しては最後までやり通そうとする。
前世の夫フェレスと
新天地での生活を夢見て
動き出す。

フェレス・カエルウム

長寿な妖精族のひとりで
気まぐれな性格。
セラティナーの前世の夫で番。
稀代の魔法使い。

ジグルド・プラティーン

セラティナーの父親で
プラティーン公爵。
セラティナーに
辛く当たっていたが……

シュヴァルツ・グリージョ

セラティナーの婚約者で
聖女であるルチアと幼馴染。
セラティナーからの
婚約解消を拒み、食い下がる。

ルチア・ルナリア

王国に現れた待望の聖女。
シュヴァルツを愛している。
セラティナーに対し、
行きすぎた無礼を働く。

エルサ・プラティーン

セラティナーの妹。
姉との仲直りを
ようやく果たし、
フェレスとの仲を応援する。

プロローグ 新たな一日の始まり

「ん……」

カーテンの隙間から差し込む眩しい陽光が瞼に当たり、眠っていた私の意識は急上昇し、デューベ이를頭の天辺まで引っ張って再び眠りに就こうとした。が、生憎と私の意識は二度寝をする気分ではないらしく、眠気が吹き飛んでしまつては目を瞑つていても眠りに就けない。デューベいを下げ、上体を起こした私は部屋に差し込む陽光に目を細めた。

「今日も一日が始まるのね」

少し前に開催されたローウェン王太子殿下の誕生日パーティーで、会場の真ん中でダンスを踊る婚約者のシュヴァルツ様とその幼馴染で聖女の力を持つルチア様を見て、私の覚悟は決まつた。

王国一の財力と強大な魔力を持つ代わりに、魔法が使えない一族と蔑まれるプラティーヌ家には時折魔法使いの才を持つ者が生まれる。私は幸か不幸か魔法使いの才を持つて生まれた。

プラティーヌ家の血を引く者は、魔法使いの才を持つ血族を妬み嫌う。

父も例外じゃなかった。

幼少期から両親に愛された記憶がない。私を妬み疎む父と先代公爵夫人である祖母に似た私を、

祖母に嫌われている母は同じく嫌い、妹も両親の背を見て育った為私のことを常に見下していた。家族からも婚約者からも愛されない不遇な人生。普通だったら彼等の愛を得ようと必死になるか、若しくは与えられない愛に絶望してしまうかのどちらか。私は幸いどちらも必要とせずとも普通でいられた。

私には前世の記憶があった。人間のセアラだった私に求愛し、寿命を迎えるその瞬間まで愛してくれた夫フェレスに会いたくなかった。生まれ変わった私を見てもフェレスが気付かない可能性はある。私の他に愛する人を見つけて暮らしている可能性もある。

それでもいい、一目見たい気持ちが強く湧いて行動に出た結果——前世の夫はセアラが私だと気付いていた。私が前世の記憶を持って生まれたのは、もう一度私に会いたいと願ったフェレスが転生の魔法を使ったことによる影響だった。

帝国の魔法使いであり、皇帝陛下が重宝するフェレスが私を妻に欲しいと求婚すれば、私を嫌っているプラティーヌ家やシュヴァルツ様と早々にさようならができると思っていた。

現実はどうでもなかった。

プラティーヌ家……もとい、お父様についてはよくわからない。私を一番嫌っているのに、私がプラティーヌ家を出て隣国へ行っても生活に困らないようずっと前から手を回していたと知った。

ただ、その理由がお父様の妹フアラ叔母様が研究していた青い薔薇ばらに関するのとわかると見方が変わってくる。

次にシュヴァルツ様。フェレスの求婚を受けた私にやり直しの機会を求めた。散々ルチア様と仲

睦まじくしてきたのに、私がシュヴァルツ様の側を離れるとなった途端執着心を露わにした。

これが最も理解不能で頭を悩ませる。玩具箱の奥に仕舞われていた玩具が捨てられそうになって初めて存在を思い出したようなもの、とフェレスは言うけれど……

フェレスともう一度一緒になるのには、まだまだ時間が掛かりそうだ。

お父様やシュヴァルツ様の本心はもちろん、妖精の命を奪って咲くとされる青い薔薇ばらという存在が出てきてしまったために……

私、セラティーナは屋敷の裏庭にあるガーデンベンチに座っていた。

数日前、叔母が研究していた青い薔薇が十八年前から起きている妖精狩りに関係していると踏んで、当時を知る料理長を連れて組合へ赴いた。

そこでフェレスとも相談して、事件の黒幕であると推測するグリーンジョ公爵邸に怪しまれず侵入する方法として、二十日後に開催される『狩猟大会』を利用することとなった。

『狩猟大会』が終わると毎年グリーンジョ公爵邸で親しい者だけを集めた小パーティーが開催される。グリーンジョ公爵の令息、シュヴァルツ様のいまだ婚約者である私も当然今年も参加だ。すでに招待状も届いている。

組合から屋敷に戻った後、料理長にはこのことを父に告げるのは事件解決後にしてほしいと頼み、黙ってもらっている。

参加を反対されるかと思いきや、意外にも料理長は納得してくれた。

理由を訊くと、私が妖精狩りについて調べていると知れば、必ず父、プラティヌ公爵は止めるから、だと告げられた。

料理長は続けてこう語った。

『旦那様はグリーンジョ公爵が叔母のフアラ様にそっくりなセラティーナ様に、強い執着心を持っていると危惧していらつしやったんです。どうにかしてシュヴァルツ様とセラティーナ様の婚約を回避したかったようで』

待ちに待ったフアラ叔母様以降の魔法使いの才能を持つプラティヌの娘を、王家も貴族も手元に置きたがったそうさ。シュヴァルツ様を選ばれたのは、たまたま婚姻を結ぶにふさわしい良家の筆頭がグリーンジョ家だっただけ。

婚約してからの長い間、シュヴァルツ様が私を冷遇してルチア様を優先しようとも、父が口を挟むだけで何も動かなかったのは、婚約解消か婚約破棄かのよい機会だからと狙っていたせいらしい。調理場で料理長は困った顔をして言った。

『ものすごくわかりにくいですが、あれでも旦那様はセラティーナお嬢様がグリーンジョ公爵令息様を好いていらつしやるのかと、少しご不安だったようですよ』

『料理長からも私がシュヴァルツ様に好意を抱いているように見えた？』

『いえ全く。お嬢様は最低限の義務を務めていらつしやるだけだと思っております。旦那様もそう見ていたはずですが、人の内心はわからないからとかなり慎重な様子でしたね、お嬢様が婚約破棄を求めた時は大層安心なさったそうです』

『そうだったの？ お父様、全然そんな風には見えなかった……』

『旦那様は公爵家の当主の道がなければ役者にでもなろうかと若い頃仰っていましたから。それほどに、旦那様は演技が上手い』

屋敷に仕える者の中で最も親しいのが料理長ともあつてか、父は彼には何でも話し、時には相談さえしていたようだ。

今日はもう特に用事がない。

組合へ行こうにも頻繁に足を運ぶと周囲にも訝しがられるだろう。

フェレスとは毎朝毎晩会っているから寂しくはなかった。

やはり直しを強く希望したシュヴァルツ様からの接触もあれ以来ない。

やはり、長年側に居続けたルチア様との関係を絶つなど、彼にはとうてい無理なのだ。本人も自覚しているからこそ私に何もしない。

「お嬢様！ セラティーナお嬢様！」

近くからナディアが呼ぶ声がする。

いつから裏庭にいたか忘れたものの、まあまあな時間を過ごしていた。

ベンチから立ち上がり、ナディアの声が聞こえた場所に向かうと、彼女は私の顔を見るなり安堵し、声をかけてきた。

「どこにいらしたのですか」

「裏庭で少し考え事をね。どうかしたの？」

「あ、はい、グリーンジョ様がお見えです」

「シュヴァルツ様が？」

先ほど考えていた相手が先触れもなくやって来た。

事前に連絡を入れてほしいと以前にも言ったのに……

小さく溜め息を吐き、シュヴァルツ様を待たせている客室にナディアを連れて向かった。

こちらです、と扉を開けてもらうと部屋の真ん中にシュヴァルツ様がいた。座って待っていてもよいのに、落着かない様子で窓側に立っている。

「ご機嫌よう、シュヴァルツ様。以前にも訪ねてこられる時には先触れが欲しいと申し上げたではありませんか」

「送つても君は会ってくれないのではないかと思つて……」

「事前に送つてくだされば待ちます。無視をするような人間ではありません」

言いたいことはまだまだたくさんあるが、訪問の理由を尋ねる前に座りましようと思を掛けた。お互いがソファに座つたところで用件を訊く。

「今度の『狩猟大会』に、隣国の皇帝陛下と皇太子殿下がご出席になるそうだ」

「隣国の方が参加されるのは初めてですわね」

あえて知らない振りをする。

「例の……カエルレウム卿も参加されるのだろうか」

「どう、でしょう」

あの場でフェレスが参加するかどうかは聞いていない。

そういった催しに興味がないはずだからおそらく参加しないだろう。

「毎年、優勝者には願う相手から榮譽を与えられる。……セラティーナ、私が優勝したら君からの

「榮譽が欲しい」

「私の？」

まさかの申し出に吃驚^{びっくり}してしまう。

優勝者が決まると同時に榮譽を授かりたい相手を主催者が尋ね、参加者の帰りを待つ令嬢に伝える。

何度か優勝をしているシュヴァルツ様だが、一度も私からの榮譽を欲しがりはしなかった。回数
は覚えていないが、優勝する度に彼が榮譽を求めた相手はルチア様だ。一度も私に視線を寄越さず、
まっすぐルチア様のもとへ歩み寄り、榮譽の証^{あかし}たるバッジを付けられていた。

驚きのあまり、瞬き^{まばた}を何度も繰り返す自分は多分悪くない。

私は気まずそうに視線を逸^そらしたシュヴァルツ様にこっそりと溜め息を吐^ついた。

「駄目……だろうか」

「そう思われたから目を逸^そらしたのでは？」

「……」

何とも言えない、気まずい雰囲気になってしまった。

やり直しがしたいシュヴァルツ様からすれば、今までルチア様に求めていた役割を私に変えるのは当然なのだろう。

ただ、今さらという気持ちが膨らみ、私は非常にいたたまれなくなった。

あの時、やり直し期間の提案を受け入れなかったら、私が折れるまでシュヴァルツ様は粘^ねっただ

ろう。

それなら、条件付きで折れる方が楽だと決めた、あの時の自分を殴りたくなった。

「無理に私に頼まなくても、ルチア様以外なら誰であろうとかまいません」

「それでは私の気持ちが君に通じないじゃないか」

「シュヴァルツ様」

語気を強めて彼の名を呼び、背筋をまっすぐに伸ばして「少しはわかってください」と告げる。
やり直し期間を設けてほしいと願った彼に、条件付きとはいえ承諾したのは、どれだけ断ろうと
決して折れない意志を感じ取っただけだからだ。

ルチア様との接触を一切絶つという条件も、シュヴァルツ様とのやり直しも、最初から信じてい
ないと言い放つ。

ショックを受けて呆然とするシュヴァルツ様に、多少の申し訳なさを抱きながらも続けた。

「貴方も頭のどこかでは、私が貴方とのやり直しを受け入れないとわかっていたはずです。婚約破
棄^きにしてもシュヴァルツ様にはルチア様がいます。私も王国を去り帝国で暮らしますから、貴方が
気^きにすることはなにも——」

「なら、どうしたらいい」

切羽詰^{せつば}まった声色に言葉を途中で遮^{さへぎ}られた。

私の側に移るなりその場で跪^{ひざま}いたシュヴァルツ様は灰色の瞳で苦し気に、切なそうに私を見上
げてくる。簡単に信用してもらえないのはシュヴァルツ様とて覚悟の上だろう。

その上で私とのやり直しを懇願し、信用される行動を取っているようだが、今まで無下に扱われてきた経験がありすぎて、私としては遅すぎるという気持ち拭えない。

ずっと側に居続けたルチア様と婚約を結び直した方がシュヴァルツ様にとってもいいのに、結婚するのは私とだと譲らない。

「私は君がいいんだっ、セラティーナ以外は考えられない」

「ではお伺いしますが……シュヴァルツ様は私が婚約破棄をしなければ、カエルレウム卿に求婚されていなければ、ルチア様をどうなさるつもりだったのですか？」

「私にとってルチアは幼馴染で妹のような存在だ。セラティーナと結婚したら、距離を置くつもりではいた」

「ルチア様から聞きました。シュヴァルツ様は何度も愛しているとルチア様に仰つていたそうですね」

そこに愛情はなく、家族愛に似た情しかないとは最近になってわかるようになったと彼は言ったが、ルチア様はそうではない。

本気で、女性として彼に愛されていると思っていたはずだ。

ただシュヴァルツ様は私の予想通り、身内に似た情しかなかったのだと気付いたと言葉を紡ぐ。私ははあ、と今度は大きな溜め息を吐いて淡々と指摘した。

「ルチア様に問題がなかったとは言いませんが、こうなったのは全てシュヴァルツ様のせいであると理解していらっしゃいますか」

幼い頃から自分を大事にし、婚約者がいても常に優先し、どんな願いも叶えてくれる。

灰色の髪と瞳を持つシュヴァルツ様の美貌は王国でも随一の美しさを誇る。そんな相手に長年大事にされて、本当は愛されていなかったなどと考える女性はまずいない。

さんざん甘やかし、大事にしたのなら、責任を取って婚約するべきだ。

現にルチア様の実家ルナリア伯爵家は、我がプラティーヌ家から私に対する侮辱を糾弾され、商会との取引を中止されるという窮地に立っている。

現状打破するためにはルチア様とシュヴァルツ様の婚約が必須なのだ。

二人が婚約すれば取引停止を免れる、私がそう指摘すると彼は気まずそうに俯いた。

ルナリア伯爵が何度もグリーンジョ公爵邸に押し掛けているとは聞いている。

聖女を甘やかしたツケが回っているだけだと、公爵は知らんぷりを貫いているようだ。

伯爵家の小麦は品質が良く生産量も多いので重宝しているが、同等の品質と量を持つ貴族はまだほかにもいるから助ける気もさらさらないらしい。

「……ルチアについては悪かったと思っている。私ができる償いは何でもする。だからセラティーナ、この一月の猶予だけはなくさないでほしいっ」

「……」

シュヴァルツ様の真摯に訴える瞳から、今度は私が目を背けなくなった。

声も瞳も嘘を言っていない。本心からやり直したいのだと訴えられ、断り続ける自分が間違っているのかと錯覚しそうになる。

「これからは月一ではなく、週に一度デートをしよう。プレゼントも定期的に贈る。セラティーナへの気持ちも積極的な言葉にする。ほかに私ができることなら何でもする」

返答に困っていると唐突に声が響いた。

「――紳士がレディにしつこくすると嫌われるよ？」

私とシュヴァルツ様は声の間こえた方を向く。

いきなり気配もなく現れたのはフェレスだった。

ずっと私の横に腰掛けたフェレスを、側で跪^{ひざまず}いていたシュヴァルツ様が敵意を隠さない目で睨^{にら}む。

「カエルレウム卿っ」

「ご機嫌よう、グリージョ公爵令息。僕の妻になる女性を困らせないでほしいな」

「今はまだ私の婚約者です。気安く近付かないでもらいたい」

「諦めの悪い男は同性にも嫌われるよ。彼女が簡単に君を信用しない理由は簡単さ、今までの自分の行いを思い出してみなよ」

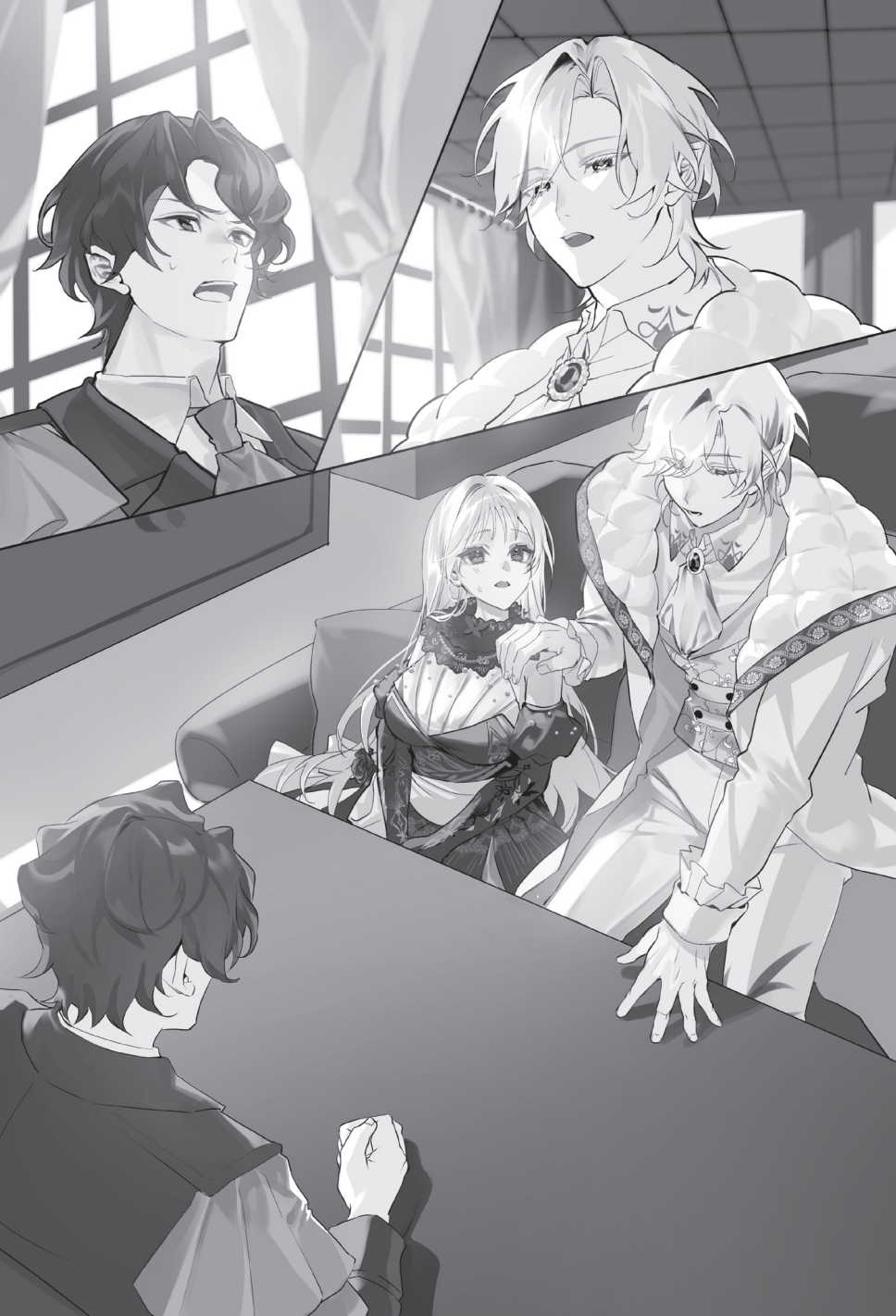
「そのために私はやり直すと決めたんです」

「決めたのは君だけだろう？ 彼女は、しつこい君に折れたただけだ。現に君は一つも信用されていないじゃないか」

「っ、なら、貴方は」

「僕？」

「貴方には亡くなられた奥方がいると聞きました。今でも奥方を忘れられないと」



亡くなった前妻の代わりをさせるつもりの方レスにだけは私は渡せない、とも言いたいのだろうか。シュヴァルツ様の目には確固たる意志が芽生え、言葉のはしほしに方レスを責める感情が込められている。

その亡くなった前妻の生まれ変わった姿が私であると知っている方レスにすれば、前妻の代わりを求めていると思われるのは心外だろう。

けれどシュヴァルツ様は事実を知らない。知らないからこそ、それらしい理由で責める。

「確かに僕は今でもセアラを愛しているよ。忘れるつもりもない、これからも愛し続ける。そしてそのことは君にどうこう言われる筋合いはない。セアティーナ嬢をセアラの代わりにするつもりは一切ないと言っておこう」

代わりも何もセアラ本人なのだから。

私の後頭部に手を回し、髪を優しく指の腹で撫でられる。

隣からは恐ろしく冷たい視線を感じているだろうに、どこか状況を愉しんでいる方レスに困惑していると微笑まれる。

「君にも原因があるんだよ？ 彼が君にしつこくするのは」

「……」

「なぜだか、何となくわかつている顔をしてるね」

粘り強さで言うと言わんばシュヴァルツ様が上だ。

折れて一応要望を受け入れている私が負け。

受け入れたところで結局長年一緒にいたルチア様を見捨てられないと、どこかで高を括っていた。方レスから指摘を受けても反論の余地がない。

「君にとって不幸なのか、幸運なのか。今まで君の周りに彼のような人間がいなかったから、君も正しい選択ができていない」

前世と今世の周囲の人間関係は大きく違う。

私をさんざん冷遇し、放置しておいて捨てられる寸前になると必死に迫い縋るシュヴァルツ様のような人間は周囲にいなかった。

前世の父とは和解しており、友人関係で揉めた経験もなく、方レスとは最後まで関係良好で終わった。

今世の場合は私の無関心さが度を越していたせいであまり深く考えてこなかったものの、エルサとは和解できても、母とわかり合えることは一生無理な気がする。

父は……妖精狩りが解決したら改めて話をしたい。

「カエルレウム卿っ、いい加減にしていたきたい！ いくら何でも距離が近すぎる」

「うるさいなあ、少しの間口を閉じてて」

「っ！」

手をシュヴァルツ様に上げ、親指と人差し指を合わせて左から右へ動かした。

見目から変化は感じられないが、シュヴァルツ様はすぐに異変に気付く。

口を開こうともがく姿から、上下の唇を合わせたのだと察した。

さらにこちらに來れないよう結界を貼り、シュヴァルツ様からの邪魔を徹底的に阻止した。

「フェレス……」

「うるさいし、人の邪魔をする彼にはピッタリさ。さてセラ、君へのお説教はまだ終わっていないよ」

フェレスは愉^{たの}しげな表情のまま私に囁^{ささや}いた。

後頭部に回っている手に引き寄せられ、フェレスの顔との距離が一気に縮まった。端から見たらキスをしていると勘違いされそうな距離だ。向かい側からは結界を叩く乱暴な音がするのはそういうことだろう。

「セラ、教えて。彼の諦めの悪さは君に理由がないと言える？」

「……いいえ」

妖精は見目が整った者が多く、フェレスはその筆頭とも言える。

見慣れていても恥ずかしさは消えないが、視線だけは逸^そらさなかった。

「フェレスの言う通りだった。シュヴァルツ様のやり直しを受け入れても、シュヴァルツ様が私の出した条件を守るとは信じていなかった。ずっと大事にし続けていたルチャ様をけっして拒絶できないと」

自分の認識の甘さ、シュヴァルツ様がルチャ様を見捨てられるはずがないという思い込みを否定できない。

現に私の予想と異なり、シュヴァルツ様は本気でルチャ様との接触を絶とうとし、やり直そうと

している。それでもまだ仮にシュヴァルツ様が去ろうとしてもルチャ様が逃がさない、ルチャ様が何かをしでかすだろうと考えていた。

どれも他人任せで私自身の行動がない。

「追いつめられた人間は何でもする。今の彼がそうだ。君とやり直すために聖女を見捨てる選択をした。そうしても君に受け入れられないなら、何だっけるさ。君に好きになってもらえるようにね」

「ん……」

近付けば触れられる唇、その距離を瞬間につめてフェレスがキスをした。

婚約がなかったことになるまで待つてほしい私の希望を叶えていた彼も、そろそろ我慢の限界だったのだろう。

触れるだけのキスを繰り返し、多少満足した様子で話の続きをした。

「彼を諦めさせる簡単な方法がある。君が僕の亡くなった妻の生まれ変わりだと話せばいい」

それが最も納得させられる方法。

私もうすうすわかっていたので、そうね、と呟いた。

「ただのセラティーナとして、王国を去りたかったの。余計な詮索^{せんさく}はされず、好き勝手想像されても時が経ったら皆、私のことを忘れる。帝国に行ってしまうえば、ただのセラティーナを気にする物好きはいないと」

「君の身内は？」

「エルサやお父様には話しておくわ。エルサは決めていたけれど、お父様にも話しておいた方がよさそう」

過去に何人かいた魔法使いの才能があるプラティナ家出身者の存在は、身内以外には時間と共に人々から忘れ去られた。

「そろそろ結界を解くよ」

「うん。私から話すわ。ちゃんとシュヴァルツ様が納得するように」

「ふふ……まあ、無理だと思うよ」

「え？」

「僕から言おうと君から言おうときつと彼はこう言う。『騙されるなセフティナ』ってね」

「……」

容易に想像できる光景に、小さく溜め息を吐いた。

もう一度キスをされ、満足げに微笑んだフェレスが離れると結界も解かれた。

シュヴァルツ様に向かつて手を伸ばし、親指と人差し指を重ね右から左へ流した。合わせられていた口が自由に動けるとわかると、怒気の込められた相貌でフェレスを射抜く。

「カエルレウム卿！ セフティナに何をした！」

「さあ？ 君は何を想像しているのかな？ お年頃だからって不埒な妄想を外するのはいいかなものかな」

「っ、下衆な勘繰りをしているのは貴方だ！」

極端に顔を近付ければ大抵の人はキスをしていると勘違いする。

言い返され、顔を赤くして怒りを露わにするシュヴァルツ様の手が私に伸びた。

腕を掴まれそうになったすんでのところでフェレスに抱き寄せられ、その手から逃れるとシュヴァルツ様は大きな声で私を呼ぶ。

私はフェレスの体を押して離れるとソファから立ち上がり、少々頭に血が上って興奮しているシュヴァルツ様に頭を下げた。

突然の行動に目の前にいるシュヴァルツ様があたふたとしているのが伝わる。

先ほどフェレスに言われた通り、関係性をややこしくしているのは私の考えの甘さに加えて優柔不断な態度が原因だ。

小麦の粒程度も私のことなんて考えていないと思っていたシュヴァルツ様が必死になる姿を見て、どんな言葉や態度を示せば正解かわからなくなった。

優しいだけではなく、間違いを指摘し、選択肢を提示してくれたフェレスには感謝しかない。優しいだけだったら僕は君を愛していない証だよ、とは前世で言われた台詞だ。

今こそ告げなければ。

妖精には運命の伴侶がいると。

長い年月を生きる妖精でも見つけるのが不可能に近い存在であり、伴侶が同じ妖精族とも限らないのだと。

現にフェレスの相手は前世の私、人間のセアラだった。

埋められない寿命の差に嘆き、悲しむあまり、人間が伴侶である妖精の場合、これからも長く続く生に絶望し——死に就く者も多い。

そんな中フェレスが使ったのは別の人間に転生させる魔法だった。

もう一度セアラに会いたい、セアラに愛されたい、セアラを愛したいという彼の気持ちが強く残り、転生魔法を成功させた。

「シュヴァルツ様。貴方にずっと黙っていたことがあります」

「セラティーナ……？」

ぱっと顔を上げ、困惑しているシュヴァルツ様の灰色の瞳をまっすぐに見つめたまま、かつて自分がフェレスの妻だった事実を語った。

人間である自分に惚れたフェレスに求愛され、交際を重ねて受け入れたこと。寿命を迎えるその時まで愛し愛されていたこと。

そして、もう一度会いたいと願ったフェレスが掛けた転生魔法によってセラティーナ・プラティーナに生まれ変わったのだと、全て話した。

途中口を挟まず、最後まで黙って聞いていたシュヴァルツ様の相貌から少しずつ感情が削げ落ち、最後は痛々しい姿で呆然としていた。

どれだけ必死になってやり直しを望もうと受け入れられなかった理由を知ったのだ。無理もないのかもしれない。

「シュヴァルツ様にとったら、私が貴方を騙していたとお思いになるでしょう。責めていただい

てかまいません。ずっと黙っていた私に非があります」

「セラティーナ……」

シュヴァルツ様は血の気を失い、ふらつく足取りで近付いてきた。

座ったまま眺めているフェレスが動きそうな気配を察知し、大丈夫だと一瞥して再びシュヴァルツ様を見やった。冷たい灰色の瞳や整った顔立ちが今にも崩れ、泣きそうなのを堪えていて、何を言われるかと緊張が走った。

「君は……」

「……」

「君は……そこまで私を信じてくれないのか？」

——え？

「カエルレウム卿程の魔法使いなら、転生という信じられない魔法も使えるだろう。君がカエルレウム卿の亡くなった奥方の生まれ変わりというのも、相手が卿であるなら事実なんだろう」

「なら」

「けど、この十八年間、卿は君の前に全く姿を現さなかったじゃないか。君だって卿を覚えてな……」

言い掛けてハツとしたシュヴァルツ様。

何度か彼自身が口にしてきた私の寂しそうな姿。

あれは、婚約者が他の令嬢と仲睦まじくしているから寂しさを覚えた訳でも、家族にも周囲にも

愛されていない孤独から来ている寂しさでもなかったと気付いたのだろう。

今まで見ていた私の寂しさの理由がフェレスなのだとしたら、いくら言葉^{ことば}を紡いでも信用されない理由に納得がいく。

「……ずっと……カエルレウム卿を想っていたのか……？ 私と婚約してからもずっと……？」

「初めは私もなぜ前世の記憶を持っているのかわかりませんでした。フェレスが今どうしているのか、私以外の人といえるかどうかとも知らなかった。貴族の娘に生まれたのなら、貴族の義務を果たすのが役目だと考えました」

平民ではない、貴族ならではの政略結婚も受け入れるつもりだった。

ほかに好きな相手のいるシュヴァルツ様が婚約者になっても、私の気持ちは変わらなかった。

だが肝心の相手にその気がないなら、私が歩み寄る努力をしても無駄に終わったのだ。

「もしもシュヴァルツ様が私を正式な婚約者として接してくれていたら、貴方とのやり直しも前向きに検討したでしょう」

けれど、もしもの話であって現実は全て違う。

それでも自分の優柔不断な態度と考えると、変に期待を持たせてしまい申し訳なかった。

改めて頭を下げて謝罪する。

——扉に耳を立てて中の会話を聞いていたとある二人も、その告白に驚きを隠せなかった。続きを聞くために声を上げず、静かに聞き耳を立てる姿は父娘なのでそっくりである。

第二章 私が馬鹿だった

時刻は真夜中。

外は暗闇に包まれて一人、淡い光の玉を宙に浮かせテラス近くの椅子に座り外を眺める姿があった。

リンレイ帝国皇帝シャルルである。

彼は浮かない相貌で長い間外を眺めていた。

「夜更かしかい？」

音も気配もなく現れた僕に大きな溜め息を吐き、宙に浮かせている光の玉を当ててきた。

「改めて見ると妖精族と人間には、縮めようのない差があるな」

「何の話？」

「見た目の話さ」

自分自身の見目に興味を持っていたのは随分昔の話。現在では愛しい人に恥ずかしくない程度に保つだけだ。夜空に星々の輝きを持つ銀糸と瞳に月を宿した濃い青の瞳の人間離れた美貌が、僕を人間という小さな存在とは違うとシャルルは語る。スラスラと気障^{きざ}な台詞^{せりふ}を出せると呆れる。が、今の僕は機嫌がいい。

隣の王国で良いことでもあったかと冗談交じりに尋ねたであろうシャルルに、「君次第だ」と言い放った。

「私？」

シャルルの向かいに座った僕は、肘置きに肘を立て頬杖をついた。

「ああ、そうさ。君次第」

「なぜ私なのだ？」

「僕の大事なセラの婚約者は、彼女が僕の亡くなった妻の生まれ変わりだと知っても諦めてくれな
いんだ」

「そうなのか」

報告書や僕がセラティーナ本人から話を聞く限りでは、あの坊やの想い人は聖女、だった。

婚約解消を迫り、公爵令息シュヴァルツの気持ちの蓋を開けてみれば、聖女に抱いていたのは親しい相手への情で、それを愛と勘違いしていた。

実際に女性として愛していたのは婚約者のセラティーナだと言う。

自分の側から離れてしまう危機感を持つてやっと自覚するのは、口にした僕やシャルルでも呆れた。

愛する女性の愛する相手が自分ではないと知り、さらに相手が妖精族の僕と知ったなら勝ち目はないと諦めるのが普通だ。

「なぜだろうね」

心底わからないと零せば、人間ならではの意見をシャルルが言ってくれた。

「私は恋愛に関しては適切な意見は言えないが……距離が近すぎた、からではないか？」

「へえ」

「それに報告書を見る限り、プラティヌ公爵が婚約者に対して何もなかったのも理由の一つにあるんじゃないのか」

「そう」

「……」

尋ねたのは僕だが返事は心底どうでも良さに相槌を打った。人間側の事情なんて本当にどうでもいい。

こめかみをピクピクさせつつ、恋を自覚した男の執念はすさまじいなどだけシャルルは告げた。さつきまで生返事しかなかった僕は今の言葉でようやく興味を示し、どういう意味だとシャルルに問うた。

「だってそうだろう？」

シャルルは肩を竦めた。

「やっと本当に誰が好きなのかを自覚したのはいいが、やり直しを願う相手にはすでに別の相手があった。加えて彼女が好きな相手は自分よりも地位も権力も格上だ。必死にならないはずがない」

「おかしい話じゃないか。彼には聖女がいるのに」

「疑問なんだが……」

帝国として聖女の力を維持する上で最も必要不可欠なのは純潔だという知識が当然ある。

王族と婚姻する際は特殊な方法で子を授かるが、王族以外だとどうなるのか。

今まで興味がなく、現在も大して食指が動かないがシャルルに例外はないのかと訊くと、例外がないせいでシャルルもはつきりとは掴めていないらしい。

何でも知っているフェレスならわかるか？ と訊かれたがどうしても良さげに首を振った。

「そうか」

「その辺は王国が決める。僕達には無関係だ」

「それもそうだな」

「シャルル、君が派遣した調査員からの連絡は聞いた？」

「……ああ」

話題の重要度が変わり、シャルルの態度が大きく変わる。

真剣さを格段に増した顔で背筋を伸ばし、姿勢を正した。

「正直信じられない。妖精族の命を栄養とする植物があるなんて」

「実在するから、妖精達は次々犠牲になっているんだ」

「グリージョ公爵はセラティーナ嬢の叔母を蘇よみがえらせたのか？」

「これは、あくまで僕の予想」

死んでいると思われるセラティーナの叔母フアラは実は生きている。

だが死んでいるも同然の状態ではないか、というのが僕の予想。

死ぬ間際、妖精に呪いを掛けられ、全身いたましい姿になったフアラは死にたくても死ねない体になったのだとしたら……魔法使いの才能があつてフアラと似ている容姿のセラティーナにグリージョ公爵が執着するのも納得がいく。

妖精達から奪った魔力を使ってセラティーナの肉体にフアラの魂を入れるつもりではないかと。

肉体に別の魂を強制的に入れられれば、元の魂は地獄に落ちるという。

死後には罪人と同じ扱いをされ、魂の番人にはひどく虐められてしまう上に、輪廻りんねの輪に入れず、二度と転生されなくなる。

「器移しが目的なら叔母に魔法使いの才能や容姿が似ているセラは最高の器だよ。息子とセラの婚約が最も手取り早くグリージョ公爵家に引き入れる手段だと踏んで、結んだんだろう」

「ふむ……どうにかして阻止しないと。調査員の連絡では約二週間後に開催される『狩猟大会』の後に機会が巡ってくると聞いたぞ」

催しが終わった後、グリージョ公爵邸では親しい者を集めた小パーティーを開く。

まだシユヴァルツシュヴァルツの婚約者であるセラティーナも招待されており、参加する流れだ。

適当に子ウサギかネズミという小動物に魔法で化けて、僕と調査員一名が会場に入る予定となっている旨は予めシャルルに聞かされている。

「それね」と背凭せもたれに体を預けた僕は、シャルルに信じてもらえない言葉を述べた。

「シャルル、僕は長生きである分、自分の死期を悟っている」

「な、なんだ、いきなり」

「グリーンジョ公爵が隠している青い薔薇に捕まれば僕であつてもただでは済まない。もし僕が捕まったら、その時点で死んだと判断してくれ」

「何を言っているんだ、フェレス。やつと生まれ変わった奥方と会つてまた一緒になれるという時に、不吉なことを言うな」

自分で言うのはなんだが常に自信に溢れ、不敵な態度を崩さず、自分のペースを維持したい。

そんな僕が自分の死を悟るなどという言葉に、真夜中だと忘れかけるほどシャルルは衝撃を受けた。

妖精が故に、件の青い薔薇に捕まれば僕でも瀕死に陥るだろうとはシャルルとて解しているが、やすやす捕まるような妖精じゃないとも知っている。

「フェレスッ！」

『狩猟大会』までには対策を練るけど、間に合わなかったら覚悟しておいて」

「そんなことは許さんつ、お前に死が訪れる危険性が高いのであれば、グリーンジョ公爵邸への侵入は到底認められない」

これからも長く帝国の守護を務めてほしい気持ちが強いシャルルは、幼少期から僕に魔法を教わっている弟子の立場であり、シャルルは決して認めようとしなない。

僕が行かないと他人では、仮に青い薔薇に襲われた場合対処は不可能で、かと言って他に打つつけの相手がいない。断固拒否の姿勢を示すシャルルが、「フェレス。お前以外に打つつけの相手がいる」と不意に言い出した。

青い薔薇が捕食するのは妖精のみ。人間の魔力は不味くて薄いから狙われない。
なら――

「私がフェレスの代わりにグリーンジョ公爵邸に侵入しよう。貴方が死ぬと信じていないが、万が一の場合がある。そうなれば私はもちろん、セラティーナ嬢もひどく悲しむだろう。青い薔薇が一般の人間を襲わないなら、気を付けるべきはグリーンジョ公爵や屋敷にいる人間だけだ」

「ありがとう、シャルル。君ならそう言うと言じていたよ」

「……」

ただの人間に危険だとわかり切っている頼みはしない。子供の時からしつこく僕に絡みつ、魔法を教えてやっていたシャルルにしか頼めない。他にランスに頼むという選択肢はあるが、人間と妖精のハーフで純粋な妖精と比べると危険度は下がるだろうが人間より上がる。なら、やはり頼めるのは僕が信頼している数少ない人間の一人であるシャルルしかない。僕の感謝の気持ちをわかってほしくて顔の周りを魔法で明るく照らした。

僕の顔を見て、やられた、とシャルルは後悔したように深く項垂れた。

「ここ数日感じていた嫌な予感今日のものだったのか……」と独り言を言っているが気にしない。

「まあ、僕であつても青い薔薇に捕まれば待っているのは死だけ。陰からサポートはするから頼んだよ」

微笑んだまま軽やかに告げる。

「ああ……普段、絶対に弱気になんてならないのに、おかしいと思つたら……」

今さらどうこう言ってもすでにシャルルが侵入するのは決定事項となった。

『狩猟大会』が終わった後、同じく参加する皇太子を先に帰らせるため、上手い言い訳を考えないといけないと、シャルルは頭を抱えた。

僕はそれを安心と愉しさで見守った。



妹と迎えた朝食の場。

私が亡くなったフェレスの妻の生まれ変わりと知って以降、シユヴァルツ様の突撃訪問はなくなった。

どれだけ拒まれようと私とのやり直しを願っていた彼でも、実は前世がフェレスの妻だったと知ると諦めたのだろう。

長くかかったが、ようやく婚約解消できそうだ。

後は『狩猟大会』に意識を集中させよう。

デザートのヨーグルトを頂きながら、今日は組合に足を運ぼうかと考える。

『狩猟大会』まで残り十日だ。

まだ日に少し余裕があるとはいえ、妖精狩りの黒幕と思いきグリージョ公爵の動向が非常に気になる。

少しずつわかってきたのは、人気の少ない場所にランスやフェレスたち、妖精族の者が行くと黒い霧を纏った者が集団で襲い掛かってくることに。

けれどランスは強い。

そしてフェレスはランス以上に強い。

よほどの相手ではない限り、二人を捕らえないだろう。

ヨーグルトを食べ終えたら早速出掛ける準備を、と思案した直後、エルサに呼ばれた。

「お姉様、この後のご予定は？」

「まだ決めていないわよ」

「なら、わたくしとブティックに行きませんか？ 今日には新作ドレスの発売日です。初日の動向を視察するのが目的ですわ」

いつもなら向かいに座る父だが、今日は不在だった。

領地へ向かう途中の宿に置いてきた母から、いつまでここにいたら良いのかと連絡が飛んできたらしい。今朝早くから馬車を走らせ行ってしまった。

本来なら店へは父が確認しに行くのだが、こういった事情のためエルサが代役を務める。

組合にはいつでも行けるのだし、自分の予定よりもエルサを優先しよう。

ヨーグルトを食べ終え、部屋に戻って早速ナディアと出掛ける準備を始めた。

プラティーヌ公爵家として赴くので一目で貴族だとわかるドレスを選ぶ。

姿見で確認し、最後ハンカチを鞆に入れたらエルサの侍女が私を呼びに来た。

「今行くわ」

ナディアを連れて玄関ホールへ向かい、先に待っていたエルサと再び顔を合わせる。

「行ってくるわね」

「お気を付けて、お二人とも」

留守を頼んだナディアに声をかけて屋敷を出る。

空は雲一つなく澄み切っていた。

ここ最近では快晴が続く、朝の妖精達の気分が最高だと毎朝枕元に現れるフェレスが教えてくれる。

朝の妖精が上機嫌だと花の妖精達もご機嫌になり、強く美しい花が長く咲くらしい。

馬車にエルサ達と乗り込むと御者は馬に鞭を叩いて走らせた。

街へ着いた後、一度カフェでお茶をし、以前エルサに紹介されたスイーツ店で自身の侍女にお土産を買う。

「あ、あの、お姉様」

「うん？」

「あー……いえ……ごめんなさい。何でもありません」

「どうしたの？ 遠慮なく言ってちょうだい」

「いえ！ また、言いたくなったら言います！」

「そう？」

「はい！」

おかしいと言えば、シュヴァルツ様に前世フェレスの妻だと知られた日から、父やエルサから妙に頻繁に見つめられる。

あの場にいたのはシュヴァルツ様と自分とフェレスだけで、ほかに人はいなかったから二人は事情を知らないはず。

もし、何らかの事情で知られていてもいつかは話さなければ、と思っていたから困りはしない。

ただ、二人がかなり訊きにくそうにしているのに、私から率先して言うのもどうしたものかと悩み、言い出せずにいる。

他愛もない会話を街の広場に着くまで続け、馬車から降りると早速ブティックへ足を運んだ。今日は新作発売日とあり、開店前から店の前に列が成っていた。

「結果が楽しみね」

「はい！ 季節物で数量限定品ですが人気が出たら増産をする予定です」

「人から人へと情報が流れるかは、今日購入するお客様に掛かっているけれど、その価値があるかどうか認められるのは商品次第。気に入ってもらえることを祈りましょう」

少し離れた場所でエルサと一緒に客層を眺めていたけれど、思わず「え」と声を出してしまった。大きな声ではないからエルサにしか聞こえなかっただろうが、「どうしました？」と訝しげに見られた。

列に並んでいる女性の中にルチア様とルナリア伯爵夫人がいると話し、ストールで二人とも顔を見えづらくしているが間違いない。

今、プラティーヌ家と関連する商会から取引を停止されたルナリア伯爵家は窮地に立たされている。ルナリア家の令嬢、聖女たるルチャ様が我が家を冒^{ぼう}流^{りゅう}したからだ。

シュヴァルツ様とルチャ様が婚約しなければ取引停止が解除されないため、伯爵は毎日グリージョ公爵に婚約の申し込みをしている。

シュヴァルツ様の私への懇願がすっかり止まり、ルチャ様も目立った動きがなかったために油断した。

このブティックがプラティーヌ家の運営だと知らないはずはない。

であれば、目的は何か。

「エルサ、裏口から入って中の様子を見ましょう」

こういう時の嫌な予感は大抵当たるのだ。

店の裏側に回ってそこから店の中に入った。

私達は通り掛かった店員に身分を明かし、責任者を呼んでくるように告げた。

すぐにブティックの責任者の女性が駆け付け、奥からこっそりと店内を見せてほしいと頼む。

「今日は新作の発売日で様子を見に来ただけけれど、気になるお客様が来店されているから、様子を見させてもらうわね」

「わかりました。気になるお客様とはどなたでしょう？」

店内へ続く扉をこっそりと開け、ストールで顔を隠しているルチャ様とルナリア伯爵夫人を探す……必要はなかった。

店内に入ると二人はストールを取り、堂々と顔を出していた。

並んでいる間、顔を隠す必要はなかっただろうに。取引を停止させられたプラティーヌ家経営のブティックに来たと知られるのが恥ずかしかったのかしら？

それともまさか、何かよからぬことを考えて……？

列に並んでいた客にはルナリア家以外の貴族の女性も平然と並んでいる。

もちろん、彼女達は顔を隠したりしていない。

「プラティーヌ家の者か、関係者がいると警戒して顔を隠していたのかしら」

「だとすれば、このブティック内に入っても顔を隠したままでは？」

「もう少し様子を見ましょう」

ルナリア家の二人が何がしたいのかわからないまま、エルサと声をひそめ合って話す。季節物は数量を限定にして客の購買意欲を刺激しようと決めていた。

流行ものが大好きな貴族は限定ものにも弱く、なおさら早く手に入れようと動く。

多少値段が張っても買うのは、見^み栄^えっ張りな性質が働いたためだ。

早速、貴族らしき女性達が新作のドレスに集まり、それぞれ店員を呼び出している。

店の中の様子見していたルナリア母娘も同様だ。

窮地に立たされているとはいえ、今の段階では購入してもたいして困る金額ではない。

店員にいくつかの新作のドレスを指差し、普通に買取しようとしている。

それを見た私は「気にしすぎただけのようね」とエルサに申し訳なくなり、謝った。

ひよつとして、シュヴァルツ様と会えない鬱憤^{うつぶん}をプラティーヌ家が運営するブティックで晴らすのではと警戒した自分が恥ずかしい。

「いいえ！ そんなことはありません。グリーンジョ様がお姉様としつこくやり直したいと願う今、聖女様からすればお姉様は邪魔者以外の何者でもありません。警戒心を持つのは自然かと」

「ありがとう。ルチア様達が店を出たら、私達も店内に行きましょう」

こくりと頷^{うなづ}いたエルサが店へ目をやった時——あ、と声を出した。

私も釣られて店内へ視線をやる。

「聞こえなかった？ 支払いはプラティーヌ家のセラティーナ様宛でお願いと言ったのよ。ちゃんと話は通してあるから」

「申し訳ありません。プラティーヌ家よりそのような話は当店に来ておりません。すぐに確認をしてまいりますので、少しの間お待ちいただけますか？」

「いいえ！ すでにこの話は通っています。つべこべ言わずさっさと会計を下さい」

……

私は思わず顔を両手で覆った。

エルサは半眼^{はんがん}になつてルナリア伯爵夫人とルチア様を睨^{にら}む。

当たり前だが夫人が言う話は聞いてもいないし、通つてもいない。

私は頭痛を覚えながらも手を顔から離して二人を眺めた。

ルチア様がそわそわしているのを見て、ふと疑問に思ったことがあった。

小声で素早く呪文を唱え、無音の風を使つてルチア様と夫人の小さな声の会話を自分の耳元に届けさせる。

“ね、ねえ、お母様、いくら何でもバレたら怒られる程度では済まないわよ！”

“安心なさい、ルチア。私達には大聖堂が味方してくれているわ。元はと言えば、セラティーナ様のせいで我が家は窮地に立たされているのよ。プラティーヌ家とて、本気で大聖堂を敵に回したくはないはずよ。支払いを拒否したら、聖女の祝福をプラティーヌ家だけではなく、プラティーヌ家と関係のある全ての貴族への祝福を中止すると言うの。そうすれば支払うしかないのよ”

“でも……”

“お母様に任せなさい、ルチア。シュヴァルツ様にもすぐに会えるようにしてあげますからね。グリーンジョ公爵様だつて、貴方達二人の想いが本物だと知れば、婚約だつて必ず許してくれるわ”

“う……うん。そう……ね。シュヴァルツとは、あれから一度も会えていないの。会いに行つても、セラティーナ様とやり直したいからつて全く会つてくれないのよ。公爵様が認めてくだされば、シュヴァルツが無意味なことをせずに済むもの！”

二人の会話はエルサにも聞こえるように調整したので二人揃^{そろ}つてバツチリと聞いた。

血の繋がりのというものを強く実感させられた気分だ。話の通じないルチア様の性格は、ある意味自分本位の考えしかできない夫人寄りなのでは？ と。

半眼^{はんがん}のままルナリア母娘を見続けるエルサに視線で“どうしますか？”と問われる。

深呼吸並みに深い溜め息を出し、私は呆れ果てた相貌のまま店内へ出ていった。

「ですよね」

エルサが半眼のまま小さく呟くのが聞こえた。

こうなるのは当然だ。

エルサは私の後を追いつけてくる。

私が覚えている限り、ルナリア伯爵夫人は勝手に他人の名を騙って買い物をする人間ではなかった。直接会った回数は少なく、挨拶程度しか言葉を交わさなかったので詳しい人とは知らないが、聖女を産み育てた母とあって、社交界では注目されてきた貴婦人。

先ほどの店員とのやり取りを聞いていると、やっぱりルチャ様の話の通じなさは母親譲りな気がしてならない。

店の奥から突然現れた私とエルサを目にし、ルナリア伯爵母娘の顔が一瞬で青くなる。

一応、自分達のしている行為が良くないとは理解していたようだ。

逆に言えば、その判断能力があるのならどうしてしてしまうのか、私の方が理解不能である。

「ルナリア伯爵夫人。先ほどのからのやり取りを拝見しておりました。私は伯爵夫人にそのような話は一切聞いておりません。他人の名を騙って代金を支払わないのは、いかがなものかと思えますが？」

「な、あ、あら、セラティーナ様。これは、その」

言い訳も儘ならないなら、なおさら大それたことはすべきじゃない。

顔色がどんどん悪くなり、同じ言葉を繰り返す。

周囲の客達の視線が自分達に集まっているのがわかる。

小声でエルサを呼び、目配せをすると意味を察したようだ。

責任者にルナリア伯爵夫人とルチャ様を別室へ連れていくよう指示をした。

「お二人とも同行してくれますね？」

「……」

青褪めたまま力なく頷く夫人とさらに顔色の悪いルチャ様は、責任者の後に続いて店の奥へ行った。

「皆様、お騒がせしてしまい申し訳ありません」

私とエルサで残った客達に謝罪を述べ、私達も奥へ向かう。

「セラティーナ様、エルサ様、こちらです」

部屋の前で待っていた責任者に案内され、私達はルナリア母娘を入れた部屋の中に進んだ。椅子に座り、青い顔のまま震える二人にそつと溜め息を吐いて向かい側に座った。

エルサも私の隣に座った。

「伯爵夫人、ルチャ様。一体どういうことか説明していただけますか。今のルナリア伯爵家でも十分に買える価格でしょう。支払い先に私の名を騙る必要はありませんか？」

ルチャ様が発端で起きたセラティーナ家と息の掛かった商会との取引停止は、大きな打撃をルナリア伯爵家に与えているはずだ。

だが、まだ日も浅いのでブティックで新作のドレスを買う余裕は十分にある。

言い逃れはできないと覚悟したのか、伯爵夫人がルチア様に似た顔で私を睨みつけた。

「そもそも悪いのはセラティーナ様ではありませんか！」

「私ですか？」

「ルチアとシュヴァルツ様は幼い頃から愛し合っていたのですよ。そして隣国との関係改善のため、王太子殿下とルチアが婚約できなかったのは仕方なかったと諦められます。しかし、セラティーナ様とシュヴァルツ様に関してはそうではありません。セラティーナ様がみつともなくシュヴァルツ様との婚約にしがみついているせいで、いつまで経ってもルチアは……！」

……見目だけではなく、やはり中身も同じだった。

脱力したくなる気持ちをぐっと堪え、隣のエルサが半眼で二人を見ているのを一瞥後、私は口を開いた。

「歴代の聖女は王族と婚姻を交わすのが習わしでありながら、ルチア様が王太子殿下と婚約されなかった。それは国同士の関係も考慮し、私も仕方ないと思います。だからと言って、ルチア様がシュヴァルツ様と婚約できない理由を全て私のせいになされても困ります」

何度も何度もルチア様に話してきた内容を母親にも丁寧の説明をした。

私との婚約を強く望んだのはグリージョ公爵であり、父ジグルドも私自身も望んでいない。

説得をするなら、そして責めるなら、私ではなくグリージョ公爵に言っしてほしい。

ついでに私はシュヴァルツ様に一切未練がないから婚約にしがみついてもいいないと話した。

「じゃ、じゃあ、どうしてシュヴァルツはセラティーナ様とやり直したがるの？ セラティーナ様

がこつそりシュヴァルツに言ったのではないの？ 本当はシュヴァルツが好きだって。カエルレウム卿に嫁ぎたくないって！」

「そのようなことは一言も言っておりません。シュヴァルツ様が婚約者として私に歩み寄る姿勢を、婚約が結ばれた頃から見せてくださっていたら、私も少しはシュヴァルツ様の言うやり直しを受け入れても良いと考えたかもしれません」

現実はどうじゃない。もう思い出すのも面倒なのでシュヴァルツ様に全く好意を抱いていない、友人としての情もないとはつきりと言いつつ放った。

愛し愛される関係は無理でも、長い人生を共にするパートナーとして、そして良き友人としての関係を築いていたらと考えていた時期もあった。

その気持ちもすでに消え去っている。

「私が何を言っても、私がシュヴァルツ様を好きだと思いいなるならそれはかまいません。ですが、シュヴァルツ様と婚約できないからと言って、購入の支払いに私の名を騙ったのは見すごせません。追加でルナリア伯爵家を訴えます」

「なっ!？」

驚愕の色に顔が染まる二人に、当たり前前だと私は深い溜め息を吐いた。

さつきから溜め息しか吐いていない気がしてならない。

「ルチアは聖女なのよ!? 聖女にそんなことをしたら大聖堂側が黙っていないわ！」

「伯爵夫人。清らかな心を持たなければならぬ聖女が、詐欺の真似をしたと知った大聖堂が味方

すると思いますか？」

「あ……そ……それは……」

私の指摘に夫人は勢いをなくし、多大に焦り始めた。
隣にいるルチャ様も同様だ。

久しぶりに誕生した聖女を甘やかしている大聖堂といえど、犯罪^{まが}紛^{まが}いな真似をしたルチャ様を許しはしない。

「この件についてはしっかりとお父様に報告させていただきますね」

「ど、ど、どうせ、セラティーナ様の仰^{おしや}ることなんか、プラティーナ公爵はお聞き入れなされないわ！」

「そうだとしても、この場にいるプラティーナ家は私だけではありませんが？」

ハツとなった夫人が私の横にいるエルサに目を向けた。

エルサは軽蔑を隠さずに睨^{にら}み、夫人はひつと声にならない悲鳴を上げた。

「私の言葉に耳を傾けなくても、お父様はエルサの言葉には耳を傾けてくれますわ」

「いいえ。お姉様の言葉にも耳を傾けてくださいます。お父様はあんな態度を取っていらつしやいます、一切話を聞いてくださらない人ではないので」

エルサは遠回しに人の話を聞かず、一方的に私を悪者扱いする貴女達とは違うのだと言いつつ、一報、唇を噛み締め、悔し気な表情を浮かべる夫人とルチャ様。

「ルチャ様」

「！ な、何よ」

「少し俗世を離れてはいかがでしょう？ こんなことを続けていらつしやれば、本当に聖女の力を失われてしまいますよ？」

「嫌よ！ もうすぐ『狩獵大会』があるのよ？ 優勝したシュヴァルツに私が栄誉を与えないとまらないのに、大聖堂に引き籠^{こも}ってなんかいられない！」

何度か優勝経験のあるシュヴァルツ様だが、毎年優勝している訳じゃない。

特に、今年は隣国の皇帝と皇太子が初参加する。

隣国との関係もあって、彼らに花を持たせる必要があり、シュヴァルツ様も優勝は狙わないだろう。

「そうですか。ただ、私も一応国民として申し上げれば、聖女の力は必要なものです。失われることがないようにお願いします」

「そんなの、セラティーナ様がシュヴァルツを離してくれたら良いだけよ！ シュヴァルツを好きでないなら、私のもとに來させてよ！」

「好きな相手を振り向かせたいなら、ご自分でどうにかしてください」

言いたい言葉を最後に投げて、まだ喚く二人を置いてエルサと共に部屋を出た。

一緒に出た責任者に「ルナリア伯爵に連絡を入れて引き取ってもらって」と伝える。

その途端、体に疲れが押し寄せて深く項垂^{うなだ}れた。

エルサに心配されてしまったが、大丈夫だと私は顔を上げる。

「こうなるなら、もつと早くからシュヴァルツ様に婚約解消なり、破棄するなり、告げれば良かったわね」

言っただとしてもシュヴァルツ様は拒否した気もするけれど……

「聖女様の話の通じなさは、伯爵夫人譲りだったのですね」

「そうね……」

「夫人が聖女様とグリーンジョ様を意地でも婚約させたいのは、グリーンジョ夫人の願いでもありそうなのがしますね。確かグリーンジョ夫人は、元々お父様の婚約者候補だったと。お父様がお母様を好きになったから、二人の婚約はなしになったと聞いたことがあります」

「ええ……」

今ならわかる。

父が母を婚約者にしたのは祖母と一切血の関係がないからだ。

グリーンジョ夫人は祖母の遠縁。叔母のような祖母に似た娘が生まれる可能性が血の薄さ故に低くても可能性がゼロではない限り、身の安心とは無縁の状態だ。父に捨てられ傷付いた夫人に寄り添い、婚約したのがグリーンジョ公爵。

「あ……」

グリーンジョ公爵が夫人を選んだ理由を考えた。

祖母と遠縁だからだとしたら、目的は……ファラ叔母様と似ている子が欲しかったから？

「お姉様？ 顔色が悪いですよ」

「だ、大丈夫」

あながち外れてはいないかもしれない予想に寒気を覚えてしまった。

アベラルドサイド 青の薔薇を完成させるには

グリーンジョ公爵家の書斎。

アベラルドは背凭れに体を預け、窓越しから夕焼けを見上げていた。

こうしていると幼い頃の記憶が蘇る。

朱に染まった空は青よりも綺麗だと、よくファラは言っていた。

青も朱も何なら紺も変わらないと淡々と言うと、「違います！」ときっぱりと断言された。

「理由を聞いておけば良かった……」

夕焼けを見ているとファラとの記憶が浮かぶばかり。

緩く頭を振った彼は執務机に向き直り、広げている書類を一つに纏め置いた。

「もうすぐだ。もうすぐ完成する」

ただ、完成直前まで迫った今、より多くの妖精の魔力が必要だ。

若い妖精を捕らえて栄養にしても十八年も時間が掛かるとは思いもしなかった。

古く強い妖精では捕らえる率が圧倒的に下がる。強くてまだまだ未熟で若い妖精の方が捕らえや

すい。

アレを完成させる最も有効的な手段は一つ。

今現在王国に滞在している帝国の魔法使いを捕らえ、その魔力を奪うこと。

フェレスは千年以上生きる古い妖精の一人で、強大な魔力を持つ大魔法使いである。

それほどの妖精の魔力を薔薇の栄養にしてやれば、アベラルドが予想する以上の成長を見せてくれるに違いない。

問題はどうかフェレスを捕らえるか、だ。何度か試しているが全て失敗に終わっている。生半可なやり方ではフェレスは捕らえられない。

かと言ってアベラルド自身が出向く訳にもいかない。王国でも屈指の魔法使いとして名を馳せるアベラルドでも、フェレスを前にするとその他大勢と同程度に分類される。

「だが」

どうしてもフェレスの魔力が欲しい。

恐らくフェレスが滞在する期間はセラティーナを帝国に連れ帰るまでだ。まだいるのは求愛している最中だからだろう。

なぜ千年以上生きる妖精が人間の娘に惚れたかはわからない。妖精は非常に気紛れな性質、今は夢中になっているても何れ飽きて捨てると聞いている。

「まあ……フェレス・カエルレウムについてはまた今度だ」

対策を練っていない訳ではないが捕らえられる確率があまりにも低い。もっと確率を上げる方法

を探すのだ。他に考える件はまだまだある。

大きな例を出せば息子のシュヴァルツの婚約について。

少し前プラティーナ家に行つて以来、部屋に引き籠っている。何があつたか尋ねても黙りこんでアベラルドも妻のエリスもお手上げ状態である。

「ふむ……」

考えられるのはフェレスの求愛をすでにセラティーナが受け入れていると知らされた可能性だ。

今まで散々放置し、他の女を愛してきた男の言葉をたつた一月で信じられるかは本人次第。

シュヴァルツの場合はルチアもシュヴァルツを愛しているためにおおさら信用されない。

『愚か者が』とは、今回の件が起きてから何度もシュヴァルツに放った言葉だ。

何をしても好きでいてくれる相手など極少数である。

セラティーナの場合はそもそもシュヴァルツを愛しておらず、彼がルチアと共にいようと何も思っていないかった。

「なぜあのように馬鹿で愚かに育ったのか……」

シュヴァルツがちゃんとルチアを忘れ、セラティーナだけを見れば面倒は起きなかった。たとえフェレスに求愛されてもシュヴァルツがいるからとすぐに断られた。

「フアラ……必ず君を……」

もうすぐ完成する青い薔薇とセラティーナさえいけばフアラは……

「……そのためにはやはりフェレス・カエルレウムがいる」